京都大学人文科学研究所共同研究 最終報告書

１．研究課題

東方ユーラシア馬文化の研究

A Study of Horse Culture in Eastern Eurasia

２．研究代表者氏名

諫早　直人

ISAHAYA, Naoto

３．研究期間

2021 年 4 月-2024 年 3 月

４．研究目的

東方ユーラシアの諸地域は、中国でさえも家畜馬や馬車の利用において先進地域ではなく、西方からの直・間接的な影響を受けて二次的に始まったことが明らかとなって久しい。またおおむね前 1 千年紀後半から後 1 千年紀前半にかけて、馬車から騎馬へと戦争における利用形態が大きく変化するとともに、家畜馬や騎馬の風習がそれまで認められなかった地域に急速に拡散していく。日本列島における馬の出現は、この変化の最終局面として捉えられる。このように個別の地域・時代に対して個々に進められてきた研究成果を紡ぎ合わせた概観は可能ではあるが、東方ユーラシアにおける家畜馬や馬車・騎馬利用の出現や普及、その後の展開のプロセスについて、資料の実態に即しつつも一貫した視野のもとに論じた研究はまだほとんどない。本研究は、こうした問題点に鑑み、中国・朝鮮半島・日本列島の馬車・騎馬文化と馬匹生産について、ユーラシア草原地帯と比較しつつ、関連する考古資料と文献史料の検討をもとに明らかにしようとするものである。

It has long been revealed that Eastern Eurasia – including even China - came a late “second’ to the West in adopting utilization of domestic horses and horse-drawn vehicles. From the latter half of the 1st millennium B.C. through the first half of the 1st millennium A.D., how people used horses in war changed drastically, from the use of chariots to riding on horseback. And the methods used in the domestication of horses and riding rapidly spread to new areas. The appearance of horses on the Japanese archipelago can be seen as the final phase of this change. Thus, it is possible to present a rough overview by connecting research results for individual regions and periods. However, there are few consistent studies on the emergence and popularization of domestic horses, chariots and horse-riding in Eastern Eurasia, and the subsequent development process, that are based on archaeological data. In light of these issues, this study provides some clarity regarding equine culture and horse breeding in China, the

Korean Peninsula, and the Japanese archipelago using archaeological materials and historical documents comparing developments in these areas with those on the Eurasian Steppes.

５．研究成果の概要

本研究班は、2019 年度若手Ａ班「東北アジアの騎馬文化と馬匹生産の研究」と 2020 年度若手Ａ班「東アジア馬文化の研究」をもとに、2021 年度から一般Ａ班「東方ユーラシア馬文化の研究」へ発展させたものである。この３年間に、20 回の定例研究会を実施し、おおむね各回ひとつのテーマについて研究発表と討論をおこなった。それにより、ユーラシア大陸における馬の家畜化の開始から車馬・騎馬の出現と伝播、そして東方ユーラシア諸地域における馬の生産・利用・儀礼・制度・言語にいたるまで、諸方面から馬文化の特質を明確にすることができたと考える。その成果については、2021 年度に一般向けシンポジウムを開催、2022 年度に一般向け書籍を刊行、2023 年度には中国での国際学術シンポジウムを開催して順次公開しており、研究期間終了後の 2024 年度以降も引き続き関連するシンポジウムの開催と論文集の出版を予定している。

６．共同研究会に関連した主な公表実績

【公開シンポジウム】人文研アカデミー2021 シンポジウム「考古学からみた古代東アジアの馬利用」（2021 年 11 月 21 日、オンライン開催、於人文科学研究所）

【出版】諫早直人・向井佑介編『馬・車馬・騎馬の考古学―東方ユーラシアの馬文化』（臨川書店、2023 年 3 月）

【国際シンポジウム】「馬・車馬・騎馬的考古学：欧亜大陸東部的馬文化（Symposium on the Archaeology of Horses, Chariots, and Horse Riding: Horse Culture in Eastern Eurasia）」（2024 年 3 月 16・17 日、対面開催、於蘭州大学）

７．研究成果公表計画および今後の展開等

【シンポジウム】2024 年 5 月 18 日の第 68 回国際東方学者会議（ICES）においてシンポジウム V「騎馬民族征服説再考―考古学からみたヒト・モノ・文化の移動」を開催し、研究班メンバーの諫早直人・中村大介・向井佑介・ジョセフ＝ライアンらが報告する予定である。

【出版】3 年間に実施した研究会での報告と 2024 年 3 月に開催した国際シンポジウムの内容をもとに、最終報告論文集を出版する。現時点での論考執筆エントリーは約 30 名で、2024 年度中に原稿を集め、2025 年度前半に刊行を予定している。